

学校関係者評価報告書 (平成 28 年度)

平成 28 年 9 月

学校法人新潟総合学院
国際自然環境アウトドア専門学校

1. 学校関係者評価の実施について

今回の学校関係者評価は、文部科学省が策定した「専修学校における学校評価ガイドライン」に沿って実施した「学校自己点検報告書（平成 27 年度）」について、当校に関係の深い 6 名の評価委員（委員名簿）に評価していただいた。

評価委員には、学校運営状況をまとめた資料を配布し、自己評価報告書の内容について説明した上で意見等を聴取した。

2. 学校関係者評価委員会 委員

氏名	職名
はたけやま こういち 畠山 浩一	公益社団法人 日本山岳ガイド協会 理事
はぎわら こうじ 萩原 浩司	株式会社山と溪谷社 主幹／山岳図書出版部部長
いの わたる 伊野 亘	国立妙高青少年自然の家 所長
みやした とみお 宮下 富男	妙高市原通自治会 会長
まるやま ゆうじ 丸山 裕治	妙高市観光商工課 主査
ただ ゆきこ 多田 由希子	一般社団法人新潟アウトドア企画 事務局長
おおたき のりお 大瀧 則雄	学校長
まつい しげる 松井 茂	副校長／教務部長／山岳プロ学科
あきやま きぬよ 秋山 絹世	事務局長
ながの やすゆき 長野 康之	自然ガイド・環境保全学科主任
たなべ しんいち 田辺 慎一	アウトドアライフ学科主任／自然保育研究科主任
はつとり まさあき 服部 正秋	山岳プロ学科クライミングインストラクターコース主任／アウトドアライフ学科
すみ とおる 鷺見 徹	山岳プロ学科登山ガイドコース主任

3. 日時、場所

平成 28 年 9 月 16 日（金） 午後 15 時 00 分～17 時 00 分
国際自然環境アウトドア専門学校 306 教室

4. 委員会次第

- (1) 開会
- (2) 評価委員紹介
- (3) 学校長挨拶
- (4) 学校関係者評価委員会について
副校長より「学校関係者評価委員会規定」等の資料に基づき、学校関係者評価委員会の位置づけや目的について再度説明した。
- (5) 職業実践専門課程について
副校長より「職業実践専門課程」の紹介資料に基づき、職業実践専門課程の設置された経緯や現在の状況を説明した。
- (6) 平成 27 年度学校自己評価報告
副校長より本年 9 月に作成した「学校自己評価報告書（平成 27 年度）」について、各評価項目における現状、課題と改善策について報告した。併せて自己評価の参考資料となる、教職員・学生・保護者アンケートの結果や、学校運営状況についてまとめた資料に基づいて学校運営の様々な状況について報告した。
- (7) 審議
各評価委員から、それぞれの議題についてご意見いただいた。評価委員の意見等は後記の通り。
- (8) 閉会

5. 審議

学校自己評価報告書の内容を踏まえ、今後の学校運営の改善等について、各評価委員から以下のような意見をいただいた。

【各委員からの意見等】

◆教育課程編成委員会について

伊野 亘 委員

- ・前回話し合った教育課程編成委員会での内容が学生に生かされた事例はあるか

松井 副校長

- ・就職してすぐに戦力として働けるような仕組みという点で各学年の授業を前倒しで行

い、インターンや外部企業との連携した授業を増やした。実際にツアーの企画・運営を学生が行うなど実践する場が増えたことで自身にもつながり良かったのではないかと思っている。

伊野 亘 委員

- ・実務が体験できることによって業界が求める人材を育成できる、本人も自信がつく、興味のある仕事に就職が実現できるということはとてもいいことだと思う。

◆平成 27 年度学校自己評価報告について

伊野 亘 委員

- ・目標に向かっての自主行動、自主学習の項目ではまらないという学生がいるが、今後学校生活を送って行く中で目標を見つけそこに向かって進んでいってこれれば良いと思う。

◆職業教育大学について

丸山 裕治 委員

- ・現在 i-nac の方にもお世話になっている DMO や、新しい妙高高原体育館ができれば温泉療法のツアーなど人材が必要になってくるので、i-nac の学生にインターンできただけということができるのではないかと。現在もトレイルランニングやライチョウの事業で学生さんにお世話になっているが、今後もそういったインターンシップの受入体制を整えていけば大学にして他との差別化を図るよりもできることがあるのではないかと。

萩原 浩司 委員

- ・目指す職業の種類や規模によっては専門学校で実践的な授業を学んでいた方がいいのか、あるいは 4 年制大学がいいのか、今はまだ実感が湧かない。

伊野 亘 委員

- ・企業の即戦力になる人材の育成、そこを急ぎすぎているような気がする。もちろん、実務経験、現場経験が学生の成長には大事なので、その方向性はとても大事である。どうゆう教育をしていくか、どんな教員で育てていくのか、一步一步着実に確立していかなければならない。専門力はもちろん、人としても社会に対応できる人材を育成しなければならない。そのような点では大学へは緩やかに向かっていくのが良いのでは。

秋山 事務局長

- ・進学校などであれば大学進学を勧める高校が多い。中には学びたい分野の専門学校への進学を断念している方もいるので、4年制大学として既存の大学と同等に見てもらえるという点で、事業推進から見ればよいのかもしれない。

大瀧 校長

- ・私が農業高校の校長をしていた時は、中学生向けの進路説明会を行うとやはり大学への進学率というのが注目されていた。全ての専門学校ではないが社会的に認知されてくるのではないかと。

松井 副校長

- ・学校周辺の動きとしては新井に新しくリゾート施設ができたり、白馬高校に国際観光科ができたりとグローバルな動きがでてきている。当校でもそのような能力を必要とする求人もあるので、会話程度の英語にも力を入れていきたいと思う。

畠山 浩一 委員

- ・i-nacの学生には新潟出身者がとても少なく、ほとんど県外出身者である。その点でも全国からここにしかない学びを求めて人が集まっている。高校生だけでなく社会人が学び直すために入学もしている。フィールドワークを大切にしているこのような学校はオンリーワンでいってもよいのではないかと。

松井 副校長

- ・学校をとりまく環境としては、クライミングがオリンピックの正式種目に決まるなど大きく状況が変わってくると思う。1年1年形だけでなく充実した内容になるよう学校運営を行っていきたいと思う。

以上